

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	スナップ
Author(s)	児童の言語生態研究会,
Citation	児童の言語生態研究 , 7 : 61 - 62
Issue Date	1975-05-24
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045085
Right	
Relation	



五才児

「たぶんおしまいだぞ。」

S児「……まあね。……してないらしい。」

M児「……の場合わよ……だと思ふな。」

七才児

A児「うわさされているかもしれないから。」

S児「ひみつぶらされるか気になるんだ。」

M子「てっきり早くきていると思っただけだ。」

K子「七才になって入る幼稚園があつてたまるか。」

四才児

Y児「手をつないだつもりだよ。この袋を持てば、ぜったいに、つもりになるよ。」

九才一ヶ月 T児

計算問題を考えていて解らずにいた所、母親が口をはさんだ途端、

「気が立つからいやだ。」

と、いきどおりを発言。

母親は、!!

四才児 (M子)

二人組で、あやとりをしていた友達が、急にことわらずに、遊びにいらしたのをみて、

「まあ、だまっていらしてしまつてあきれたよ。」

(以上、神奈川県・上溝幼稚園長 竹村房代氏報告)

二年生の男子 (H男)

先生「図書室にいきます。静かにいきましょう。となりで勉強していただきますので音をたてないで、ねこ足でいきましょう。」

児童「……?」

H男「じゃあおー。」

(以上、町田・南第四小・山口和子教諭報告)

わが家の長女 (四才十一ヶ月)

いつも、朝、目がさめると、ベットに入つたままで、突然、話し出すことを常としているが、ある朝のこと。

子「ねえ、ママ。私ね。ねている時は、おふとんの中にはいないんだよ。」

母「??? (寝相が悪いわけではないのに)」

子「だってね。私、夢を見るといつも夢の中にいるんだよ。だからおふとんの中にはいないの。」

母「今、おふとんの中にいるじゃない?」

子「今は、夢の中から、おふとんに帰ってきたんだよ。」

ある日、テレビで、桜島爆発のニュースを見たあと、

子「ねえ。火山ってね。はじめはね。グーなんだよ。それからね。パーになるんだよ。」

親「???」

ぎりしめ、つきあげながら) となつてね、あとでね、パー (指をひろげて) となるんだもん。」

(グー・パーは、ことばの不足のおきないか。はたまた、こぶしや手の動きのおきないか。)

ある日、母親と祖母が、近所の知人 (女性) が、近く、実家へ遊びに帰るらしいという話をしているのを見て

「ああ。それじゃ。○○さんのおばちゃん、退院するんだね。だって、この前、元子のおばあさんも、新潟へ退院したもん。」

(祖母は、新潟が実家)

この子が、三才の時、祖父が入院し、母親が次女出産のために入院したことがある。

「ねえ、パパ。おもしろいこと話してあげようか。」

「うん。聞きたいな。」

「あのね。ぼうしは、いすなんだよ。」

「???」

「きょうね。幼稚園でね。○○ちゃんがね。私が、ぼうしはいすなんだよって話したらね。ストーンって後におしりをついたんだよ。おかしいよね。私は、わざとおもしろい話をしたのね。」

母親が、風邪ぎみで、鼻をぐすんぐすんいわせて、薬を飲んでいるのを見て、

横浜市立芹が谷小学校
六年四組

M君
の日記

十月二日

おかしい？

「三角定規・分度器」蒸発事件発生

今日は、雨だった。体育のリレー大会も中止になってしまった。残念だ。
ところで、昨日、藤井正春氏から連絡があり、「三角定規・分度器」蒸発事件が発生した。藤井氏の三角定規と分度器が知らないうちに消えたらしい。警視庁とは全く関係のない特別捜査本部を設けた私立探偵藤井正春氏（被害者と同姓同名同一人物）は、あきすのうたがいが濃くなってきたことを今日この日記帳で明らかにした。しかし、今日になって藤井氏の友人で隣の富田寛氏の机の中に藤井氏のものと同定規と分度器が出てきた。念のため富田氏に机の中を調べさせてもらったが、三角定規は出てこなかった。となると、

何をか言わんや。

しりとりをしていて、

「動物だけね。」

と条件を出してきたので、その通りにやっていたところ、自分の番になって、種切れになって、困りはてて言うことには、

「ねえ。動物だけだと、元子、考え込んでしまふから困っちゃうな。動物だけっていうのやめようよ。」

師走の曇天の日の夕ぐれ。街の食堂の地下より地上へでる階段を、母親と一緒に昇りな

がら、

子「あやしいな。あやしいな。これは、あやしいぞ。」

と、言っている途端、階段を踏みはずした。母「ほら。ごらん。やっぱり、あやしかったね。」

子「ちがうよ。わたしは、外の空があやしいって言ったんだよ。」

見ると、あたりは、うす暗くなっている。母「ああ、夕方だからね。」

子「ふーん?!」
(以上、横浜・芹が谷小 飯住良夫報告)

「ママ、風邪ひいたの？」
「ううん。風邪きみなのだ。」
「?????。ね。風邪きみと風邪をひいたというのは、どちらがうの？」
「?!」
同じ質問を、六年生に発してみた。
六年生曰く
「風邪きみっていうのは、ビールスが、これくらいでね。(指と指で少しのすき間を作りながら)(そして腕をうーんと広げながら)風邪をひいたっていうのは、ビールスがこうなんだよ。」